

司祭叙階は男性だけに限られる。教理省長官の宣言

『オッセルバトーレ・ロマノ』誌の論壇。(Zenit-4-VI-2018)

「*Ordinatio Sacerdotalis* の教えの決定的性格」というのが2018年5月30日の『オッセルバトーレ・ロマノ』誌のイタリア語版に載った、教理省の長官ルイス・ラダリア・フェレール大司教による論壇のタイトルである。(注、*Ordinatio Sacerdotalis* はヨハネ・パウロ2世による使徒的書簡。1994年5月22日)。

ラダリア長官は「教会は女性を司祭に叙階する権能を持っていない。これは主イエスの決定であって、女性の男性に対する従属は一切ない」と述べて、この問題に関する疑義を一掃した。

この論壇において、長官は「司祭は・・・祭司キリストにかたどられ、こうして頭であるキリストと一体となって行動できるようになる」(第二バチカン公会議、『司祭の役務と生活に関する教令』2)ことを思い出させる。「キリストは12使徒にこの秘蹟を授与することを望まれたが、彼らは全員男性であって、使徒たちも男性にこの秘蹟を授けた。教会は、役務的司祭職は女性には有効に授与されないという、このイエスの決定に縛られていると常に認めてきた」と言う。

そして、ヨハネ・パウロ2世による使徒的書簡(1994年5月22日) *Ordinatio Sacerdotalis* の一文を引用する。「この非常に重要な問題に関して一点の疑いもないように、教会は女性を司祭に叙階する権能をまったく持ってない。この断言は教会の全信者によって最終的なものとして受け入れられねばならない。・・・(これは) 信仰の遺産に属する真理である」(*Ordinatio Sacerdotalis*, 4)。

## 深刻な心配

この6月28日に教皇フランシスコから枢機卿の位に上げられる予定のラダリア長官は、女性叙階の問題に関しては解決済みであるということ認めない声が、未だにいくらかの国で上がっていることについて「深く憂慮」していることを明らかにした。「(ヨハネ・パウロ2世の宣言は) エクス・カテドラ(教皇座宣言)ではないから、将来の教皇や委員会の新たな決定によって変更できる、というような疑いをまき散らすことによって、信者の間に、叙階の秘蹟だけでなく、教会が神によって建てられたという教義に関しても深刻な混乱を引き起こし、さらに通常の教導職が不可謬の仕方でもカトリックの教義を教えることができるという教えについても憂慮すべき混乱をまき散らしている」

それゆえ長官は「教会は、女性を叙階することの不可能性がキリストによって制定された秘蹟の本質部分に属すると認めている。それは、単なるやり方の問題ではなく、秘蹟の構造に関することについての教義的側面の問題である。・・・教会は、キリストへの従順によって、この伝統は変更できないと自覚しつつ、同時にこの教えの意味を掘り下げて理解を深めようと努力している。なぜなら、ロゴス(言葉)であるイエス・キリストが望まれたことには深い意味があるからである。司祭は実際、教会の花婿であるキリストの代理者として働くが、司祭は男性であるという事実は、秘蹟の中でキリストの代理となるために不可欠の要素である」

ラダリア大司教は次の点を強調する。「男女の役割における差異は、従属関係ではなく、相互の補完を意味する」と。そして、「教会の中での女性独自の役割について理解を深め、それを促進するよう」招く。それは、「男女の違いの意味と価値を理解しようと努める現代の文化に光を投げかける」ためである。

## 教導職の連続性

ラダリア大司教は「*Ordinatio Sacerdotalis* が最終的決定を下したということについての疑いは教会の教導職の理解の仕方に深刻な害を与える」と考える。「不可謬性は、公会議の荘厳な宣言や教皇の教皇座宣言のときだけではなく、全世界に散らばっている司教たちの通常で不変的な教え、つまり司教たちが、相互に、また教皇との交わりのきずなを保持しつつ、カトリックの教えを決定的なものとして認めるべきであると提示するときも成立することを繰り返し教えることは重要である」。

*Ordinatio Sacerdotalis* においてヨハネ・パウロ 2 世は、「新しい教義を宣言したのではなく、ペトロの後継者として与えられた権威をもって、通常の普遍的教導職が教会の歴史を通じて信仰の遺産に属するものとして教えてきたことについて一点の疑いも残すことのないように、それを固め、明らかにした」のである。ヨハネ・パウロ 2 世は、問題をまず全世界の司教協議会の議長司教と一緒にローマで顧問会にかけて検討させたが、議長らは全員一致で教会が女性に司祭叙階を与える権能を持っていないことを確信をもって宣言した。

長官はヨハネ・パウロ 2 世の後継者たちも同じ教えを継承したと強調する。「ベネディクト 16 世はこの教えを強調し、2012 年 4 月 5 日の聖香油のミサの中で、ヨハネ・パウロ 2 世が『取り消し不能の形で、教会が女性の叙階に関しては「主から許可を一切受けていない」と宣言したことを思い出させた』ことに言及する。

さらに教皇フランシスコは、『福音の喜び』で「聖体の中で自己を奉献される、花婿であるキリストの印として、司祭職が男性に限られることについては議論の余地はない、と再度確認し、この教えを権力ではなく、奉仕の見地から理解するように招かれた。

2016 年 11 月 1 日、スウェーデン訪問の帰途での記者会見で、教皇フランシスコは「カトリック教会での女性の叙階については、最も最近の明白な宣言は聖ヨハネ・パウロ 2 世によってなされ、それは今も有効です」と念を押された。